

《報告》

螢狩の唄考 6

～わらべ唄「ほたるこい」の作詞・作曲者と発祥地について～

後藤 好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

「ほう ほう ほたるこい、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ほう ほう ほたるこい」と歌う螢狩の唄（以下、わらべ唄「ほたるこい」と称する）は、数多い螢狩の唄の中で最も広く知られている。以前、筆者はインターネット上で散見された、この唄の作者を三上留吉とする情報について事実関係を調査し、全国ホテル研究会誌第47号にこれを否定する報告をしたことがある（後藤、2014）。この報文は全国ホテル研究会に依頼して直ぐにインターネット上にアップロードしていただいたが、その後も三上作者説は広がっているようで、近年ではわらべ唄「ほたるこい」を収録・配信しているCDや配信サイト、youtubeなどでも作詩・作曲者を三上留吉としているものも目に付くようになった。本稿では再度、わらべ唄「ほたるこい」の作詞・作曲者ならびに発祥地についての誤った情報を整理するとともに、その原因を探って見たい。

1. 作詞・作曲者とされた三上留吉について

1-1. 三上留吉について

三上留吉については鳥取県師範学校同期の蓮仏重寿によって『貝殻節—三上留吉の一生—』（1963）としてまとめられており、以下それによる。

1897（明治30）年11月、鳥取県八頭郡郡家町（現八頭町）に農家の三男として生まれた。1919（大正8）年に鳥取県師範学校卒業後、3月21日に八頭郡社小学校に訓導^{*1}として赴任するも、5月に八頭郡八上小学校へ異動した（着任は7月）。この間5月にもと結婚するが、これは婿養子縁組婚姻で、これにより三上姓となる。翌1920年に用瀬小学校に八頭郡で初めてピアノが購入されることに伴い同校へ転任した。その後、1923（大正12）年からはしばらく鳥取県師範学校附属小学校（現鳥取大学附属小学校）に勤務するが、その間『小学校唱歌科教授細目の理論と実際』（1925（大正14）年）や『レコード鑑賞を中心として考察せる音楽教育の革新』（1928（昭和3）年）の編集発行、鳥取県音楽協会理事・鳥取県小学校児童用唱歌集編集委員（1929（昭和4）年）に就任、県主催夏季講習会での唱歌科講師（1933（昭和8）年）など、鳥取県の音楽教育に貢献した。1937（昭和12）年には岩美郡三徳小学校校長兼米里青年学校長^{*2}に、1941（昭和16）年に岩美郡面影小学校校長兼面影青年学校長に就く。戦中の1944（昭和19）年に京都府綾部市の郡製糸株式会社（現グンゼ株式会社）の本社工場教育厚生課長兼私立郡は綾部女子青年学校長に転身した。戦後の1947（昭和22）年には兵庫県尼崎市の郡製糸塚口工場教育課長兼私立郡は塚口青年学校長に異動、翌年には同じ尼崎市の国土計画興行株式会社尼崎工場^{*3}の労務課長となり、1953（昭和28）年の定年退職まで勤務する。退職後は鳥取に帰郷、1962（昭和37）年に死去した。

また三上は戦前、大日本少年団（現在のボーイスカウト）の活動にも従事し、鳥取県少年団理事にも就いている。鳥取帰郷後の1954（昭和29）年からは、孫達にヴァイオリンの指導をせがまれたことをきっかけに、子ども達にヴァイオリンの個人指導を始めると生徒の人数も増えていき、“バイオリングループ「三和会」”

を結成し発表会なども行った。

1-2. 三上留吉作詞・作曲「ほたるこい」について

日本教育音楽協会が尋常小学校第1～6学年用の唱歌科教科書『児童唱歌』の刊行を計画し、1933(昭和8)年に詞曲を一般より募集した。三上は第1学年用に「ほたるこい」、第2学年用に「やまがら」を作曲し応募したが、第3～6学年用はボーイスカウトの活動で時間的な余裕が無く断念したようである。

これについては鳥取市の公益財団法人鳥取童謡・おもちゃ館 わらべ館に自筆楽譜2種が収蔵されており、それぞれ楽譜の余白に

楽譜 A:昭和八年春、日本教育音楽協会(国立上野音楽学校の一機関)が、当時の情勢に即応するため、「児童唱歌」尋一～尋六用の六冊を編修し、文部省の検定済として発刊することを計画し、歌詞・歌曲共一般より募集し、同年二学期頃出版した。

小生は、尋一用と尋二用は作曲して出したが尋三以上は、ボーイスカウトの活動等により時間的に不可能のため、作曲しなかった。

幸い、尋一用に「ほたるこい」尋二用に「やまがら」が当選し、同年八月一日付で、同協会より礼状と謝礼金を頂いた

楽譜 B:昭和九年春 日本音楽教育協会編修文部省検定済「児童唱歌」の作曲に応募 尋一 ホタルコイ、尋二 やまがら 二曲が当選採用され同年八月一日付同協会より謝礼の礼状と、金一封を受く。

尋三以上は、ボーイスカウトの活動のため、時間無く残念乍ら応募しなかった。

と、経緯が記されている。この付記の中で、作曲については触れられているものの、作詞については触れられていない。そのためか、蓮仏(1963)では「ほたるこい」は作曲のみとしており、わらべ館の収蔵資料一覧でも「No. 497 / ほたるこい (タイトル) / 三上留吉当選曲 (サブタイトル) / 三上留吉作曲 (郷土の音楽関係)」と三上は作曲のみとしている¹⁾。

三上の日本教育音楽協会に応募した「ほたるこい」の歌詞は

ほたるほたるこいこい
あっちの水はにがいぞ
こっちの水はあまいぞ
ほたるほたるこいこい

であり、わらべ唄「ほたるこい」とは1・4節目の「ほ、ほ、ほたるこい」が「ほたる、ほたる、こいこい」となっているだけである。楽譜 Aにはタイトル「ほたるこい」の右横に、上段に「日本音楽協会 募集 当選歌詞」下段に「〃 三上留吉当選曲」との書き込みがあり、当選した応募歌詞に三上が曲をつけたとも読める。しかし、当時の日本教育音楽協会の募集方法が分からないため、これ以上の経緯については不明とせざるをえない。なお、鳥取には

ほたる ほたる こいこいこい
そっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ

という螢狩の唄もあり(稲村, 1974)、この唄の歌詞と比較しても筆者には昭和初期に唱歌用に作られた歌詞としては技巧的にも物足りなく思える。

『児童唱歌』尋常小学校第一学年用が発行されたのは1935(昭和10)年で、掲載された「ホタル コイ」の歌詞は

一 ホタル コイ、ホタル コイ、
ホ、ホ、ホ、ホ、ホタル コイ。

オイシイ オミヅ ラ、
ノミニコイ。
二 ホタル コイ、ホタル コイ、
ホ、ホ、ホ、ホ、ホタル コイ。
アライ チャウチン、
ツケテコイ。

で、三上の作品とは歌詞が違い旋律も違う。楽譜Bの付記には「当選採用」とあるが、「ほたるこい」も「やまがら」も発行された教科書には使用されていない。また、募集時期も楽譜Bの付記では「昭和九年春」とあり、楽譜Bは後年書かれた覚書のようなもので、当時の三上の記憶違いだったのかも知れない。『貝殻節—三上留吉の一生—』附録の片岡気録編「三上留吉作曲目録」には、「当選して検定教科書に採用され『ほたるこい』は尋一用、『やまがら』は尋二用に載る」と記述されているが、これも誤りである。

わらべ唄「ほたるこい」の作詞作曲者が三上と誤解されたのは、この『児童唱歌』に応募した「ほたるこい」がわらべ唄と解釈されたためである。三上のプロフィールを載せている鳥取県公式サイト・とりネットの〈童謡・唱歌のふるさと鳥取／ふるさとの音楽家⁽²⁾〉には主な作品として「ふくろ」「ほたるこい」「子供の出発」があげられている。また、同サイトの〈童謡・唱歌のふるさと鳥取／童謡・唱歌百景／ほたるこい⁽³⁾〉は「旧上私都村に生まれ育った三上留吉は、この地を愛し『ほたるこい』を作詞作曲した」と、わらべ館のホームページ〈鳥取の11人の音楽家たち⁽⁴⁾〉にも「八頭町出身 作曲家／鳥取県の民謡『貝殻節』を採譜し、レコード化する。『ほたるこい』ほか」とあるが、いずれも曲名だけで唱歌とは記されていないため、曲名を見た人がわらべ唄「ほたるこい」と誤解したのもいたしかたのないことである。

なお、鳥取県公式サイト・とりネット〈童謡・唱歌百景〉は、以前の調査時に鳥取県文化政策課の方から新日本海新聞社編『童謡・唱歌百景』を元に作成されていることを伺った。この本には歌詞が掲載されているが、国立国会図書館に収蔵されておらず、鳥取県内の各図書館以外には所蔵されていないようである。

1-3. 採譜者説と貝殻節

一方で、作者説に対して疑問を持った人もいたようで、三上を採譜者としている記事も見かける⁽⁵⁻⁶⁻⁷⁾。たとえば同志社女子大学日本語日本文学科の吉海直人特任教授のコラム「童謡『ほたるこい』について」には、「教科書などに掲載されているものは、三上さんが全国に伝わる歌を採譜してまとめたものからとっています」と述べられており、他の記事も同様の記述である。採譜者説は、一般に知られている三上の功績が「貝殻節」を採譜し世に出したことからの推定であると思われる。そこで、まず「貝殻節」が広く知られるようになった経緯を見てみたい。

1884(明治17)年、気多郡正条村浜村(現鳥取市気高町)の米子新道沿いで井戸の掘削中に温泉が発見された。これが浜村温泉となり、道路沿いに旅館が建ち並び賑わうようになる。1932(昭和7)年に浜村温泉の雑貨商上田平十郎が、観光宣伝のために当時の新民謡運動にのり、新しく民謡をつくる計画を立てた。稲村謙一(ゆづる)、田中義雄、松本儀範(穰菓子)、村田豊吉(薫吉)、蓮仏重寿が集められ、各自が持ち寄った歌詞を元に協議を経て歌詞を作成し、それに三上が曲を付けることとなった。当初A面を「浜村小唄」、B面を「浜村湯もみ唄」として進められていたが、三上の提案でB面を「貝殻節」にすることになった(蓮仏、1963)。

鳥取市沿岸は海底が砂質で、漁民はジョレンに網をつけた舟で底曳漁をシイタヤガイを獲った。この時、重労働の櫓漕ぎで歌った労働歌が「貝殻節」である。三上は浜村温泉の煙草屋旅館の女将キヨが記憶していた節^{*4)}を中心に旋律を整え、松本は歌詞を浜村温泉宣伝用に一部補作し、1933(昭和8)年にA面「浜村小唄」B面「新民謡浜村音頭貝殻節」として日本コロムビアからレコード化された(蓮仏、1963)。この浜

村の貝殻節は、1952(昭和27)年、大阪市の朝日放送開局一周年記念事業で行われた「全国民謡コンクール」で第1位に入賞し、全国に広く知られるようになった。

三上は県内各地の小唄や民謡も作曲しているが、採譜曲は「貝殻節」の他は「稲葉嫁入唄」のみである(蓮仏, 1963)。また、わらべ唄の収集・採譜活動をしていた記述はまったくない。このことから採譜者説は完全に否定されよう。なお、音楽教科書に掲載されたわらべ唄「ほたるこい」については次章で扱う。

なお、本章で参照した蓮仏重寿の『貝殻節—三上留吉の一生—』には「ほたるこい」作曲の経緯が記されているだけでなく、付録の「三上留吉作曲集」に詞曲が掲載されている。そのため、この本を見ればわらべ唄「ほたるこい」の作者説・採譜者説ともに誤りなのは明らかなのだが、わずかに鳥取県内の5つの図書館が所蔵しているにすぎず、国立国会図書館にも収蔵されていない。このことも三上作者説の検証を難しくした要因の一つだったとみられる。

2. なぜ、三上が作詞作曲家とされたのか

三上作者説をはじめ、わらべ唄「ほたるこい」の作者に関する記事を見ていて感じるのは、子どもの歌であるわらべ唄・童謡・唱歌について正しく理解されておらず、誤解や混同があるのではないかということである。

わらべ唄は子ども達によって歌い継がれてきた歌謡であり、童謡・童唄と表記されることもある。作者についても「近代における子どもの歌曲である唱歌や童謡には、原則的に作者がおり、それは、特例を除けば成人である。ひとりの人が作詩と作曲の双方を手がけることもあるが、大抵は、文学者が歌詞を創り音楽家が曲を付けて完成された。しかし、わらべ唄には、そのような意味での作者は存在しない」(上, 2005)、「わが国の『わらべうた』は、その大多数がかなり古い時代から民間の子供たちに伝承されてきた唄で、作られた年代も中心地域もはっきりしないものが多く、むろん作者などは分からない」(町田・浅野, 1962)など、特殊なケースを除き作者・発祥地ともに不詳である。それは、近世までの唄ばかりでなく、明治以降に成立したと推定される「あんたがたどこさ」でも同様である(山本, 2019)。したがって、「ほたるこい」の作詞・作曲者を問うことは意味がないのである。

わらべ唄と混同されやすいのが童謡である。わらべ唄は童謡とも呼ばれていたが、大正時代に唱歌批判から起こった鈴木三重吉らの童謡運動により作られた歌も童謡と呼ばれ混乱が生じた。そのため、これらの童謡は新童謡・創作童謡・文学童謡と、わらべ唄は伝承童謡・自然童謡と称されるようになった。現在では童謡はこの創作童謡を指すことが多い。また、童謡や唱歌は創作の際に歌曲に曲名が付けられるが、伝承童謡であるわらべ唄には曲名が無く、曲名が付されている場合、多くは歌い出しの歌詞を仮に曲名としている。

わらべ唄「ほたるこい」が音楽教科書に掲載されたことからか唱歌との混同も見られ、2022年7月20日に“Yahoo! 知恵袋”に投稿された「わらべうたの『ほたるこい』の作詩、作曲者が知りたい」という質問に対して、唱歌の作詞作曲者が回答されているのはその一例である。唱歌は1872(明治5)年に学制が発布されたときに定められた小学校の教科の一つで、戦時体制下の1941(昭和16)年の国民学校令で芸能科音楽となった。また、その教科のために作られた歌曲も指し、一般にはこの歌曲の意味で用いられている。大正期に起こった童謡は日本人によって作曲されたが、初期の唱歌ではまだ作曲をできる人材がなく、外国の民謡などに日本語の歌詞を付けていた。また、戦前の文部省唱歌や日本音楽教育協会、音楽教育講習会編の教科書では作者名は記されておらず、『児童唱歌』尋常小学校第一学年用に掲載された「ホテル コイ」の作詞作曲者は不明である。

次に、教科書に掲載されたわらべ唄「ほたるこい」について詳しく見てみたい。この曲は戦前の教科書

には使用されていない。ただし、歌詞については1905(明治38)年発行の教育音楽講習会編『新編教育唱歌集(修正五版)』第一集に現在の「ほたるこい」と同じ歌詞の曲が「ほたる」の曲名で掲載されている。詞曲には作詞作曲者の名前はなく目次に「國定讀本歌詞」とある。これは1903(明治36)年に発行された文部省編纂『尋常小學讀本三』のことであろう。しかし、曲は現在知られている「ほたるこい」とはまったく違うものであり、作曲者は不明である。なお、旧版の1896(明治29)年1月発行の三木書店版に載る「螢」は現在「螢の光」として知られる歌曲である。修正改版では大幅な改訂が行われ、「螢の光」は4年生用の第四集に移されている。第一集で旧版から引き継がれたのはわずかに7曲のみで、29曲が新たに採用されており「ほたる」もそのうちの1曲である。

1941(昭和16)年発行の国民学校初等科第一学年用『ウタノホン上』*⁵⁾に掲載されている「ホタル コイ」であるが、歌詞は

ハウ ハウ、
 ホタル コイ。
 小サナ チャウチン
 サゲテ コイ。
 ホシノ カズホド
 トンデ コイ。
 ハウ ハウ
 ホタル コイ。

である。やはり、同年発行された『よみかた一』に同じ歌詞*⁶⁾が掲載されており、指導用教科書には「藝能科ウタノホン上と結んで本教材の理解を深くすることが肝要である」と記されている。

現在よく知られているわらべ唄「ほたるこい」が音楽教科書に掲載されたのは、1951(昭和26)年の学校図書発行『私たちの音楽(1年)』と東京書籍発行『新しい音楽(1年)』が初出で、その後も1976(昭和51)年の音楽教育図書発行『総合版新しい音楽(1年)』まで、いくつかの教科書出版会社によって主として1年生の教材として取り上げられている。その結果、多くの人が音楽の授業でわらべ唄「ほたるこい」に触れることになった。教科書掲載曲名の多くは「ほたるこい」であることから、三上の唱歌「ほたるこい」がわらべ唄と誤認されてしまったのであろう。

3. 合唱曲「ほたるこい」と作曲者、小倉朗について

3-1. 合唱曲「ほたるこい」作曲までの経緯

インターネットでは「ほたるこい」の作曲者に小倉朗(1916～1990)の名前も見られる。小倉の「ほたるこい」はわらべ唄をモチーフに作曲した合唱曲で、1958(昭和33)年に発表された『東北地方のわらべうたによる九つの無伴奏女声合唱曲』の中の1曲である(以下、合唱曲「ほたるこい」と称する)。

小倉朗(本名晋)は小林源松の五男として、鉄道技師であった父の任地であった福岡県門司市(現北九州市門司区)の官舎で生まれるが、生後三ヶ月で母静子の妹豊子の嫁ぎ先である東京の鋼鉄商小倉家の養子となる。6歳から長姉や従妹からピアノの手ほどきをうけた小倉は、養母から音楽家になることを勧められ、作曲家の深井史郎に師事する。1937(昭和12)年日本現代作曲家連盟に加入、同年連盟の発表会で初演された「ピアノ・ソナチネ」や「ヴァイオリン・ソナタ」が高い評価を受けた。その後も作曲家として活動するものの、1951(昭和26)年に西洋音楽一辺倒に行き詰まりを感じ「ピアノ・ソナチネ」を除くほとんどの作品を破棄した。その後、パルトークへの傾倒を深めたことをきっかけに日本民謡やわらべ唄にも感心を持ち、それらを題材にして新境地を開いた。1960年前後にわらべ唄による合唱組曲をいくつか書いて

いるが、『東北地方のわらべうたによる九つの無伴奏女声合唱曲』はその最初の作品である。

3-2. 合唱曲「ほたるこい」の構成

合唱曲「ほたるこい」の曲をみると、46小節からなる4分の4拍子の女声三部合唱曲で、高音部から順にソプラノⅠ・ソプラノⅡ・アルトの3つのパートで構成され、基本的にはこれらのパートが高音部から順に1拍ずつずれてわらべ唄の旋律を歌うように作られている。

第10・17・36・42小節と計4回「やまみちこい」が同様の形（第42小節のみ強弱記号は「*p p*」、他は「*p*」）^{ピアノ}で歌われ、旋律は一旦納まり、次の小節からの新たな展開へ繋げている。

「やまみちこい」につづく第11～14小節、第18～21小節はソプラノⅠ及びソプラノⅡが3度の音程で重なり、アルトは2拍遅れながらも、ソプラノの2パートと同じリズムを基本とした、それまでと異なる動きになっている。なお、第11・18小節には強弱記号の「*f*」^{フォルテ}があり、それぞれの4小節間には音量的にも豊かになる。また、第37・38小節は「あんどのひかりをちよとみてこい」と1拍ずつずらしており、この作品の基本的な形をとっている。

第22-25小節は3パートが同じリズムで和声的に進行している。

第23小節は松葉型のクレッシェンド（<次第に大きく）があり、第24小節第1拍（「*poco fp*」）と記されている）を迎える。また、第22小節からは発想記号「*dolce*」と共に、記譜されている唯一アゴーギク（緩急法、ここでは *poco a poco rit.* ほんの少しずつ徐々に速さを遅くする）の指示があり、第24小節（「*Tempo primo*」と記されている）で最初のテンポに戻る。

第26小節からは冒頭の動きが再現されるが、冒頭「ほほほたるこい あっちのみずはにがいで こっちのみずはあまいぞ」に対し、「あっちのみず」「こっちのみず」の間に「ほほほたるこい」（第30・31小節）が加わっている。

前半の第7-10小節の「ほほほたるこいほほやまみちこい」は後半では第34-36小節の「ほほほたるこいやまみちこい」と「ほほ」の1小節分を省いている。

第39-42小節は前半の第7-10小節と同じ音符が連なり「ほほほたるこいほほやまみちこい」を歌っている。なおダイナミクス（強弱）はこれまでの「*p*」から「*pp*」となる。第43小節から最後に向けて「*p p p*」^{ピアノ}になり、遠ざかるように終わる。

資料1. 小倉朗作曲合唱曲「ほたるこい」の歌詞と対応する小節

ほ ほ ほたるこい	(1・2小節)	ほ ほ ほたるこい	(26・27小節)
あっちのみずは にがいで	(3・4小節)	あっちのみずは にがいで	(28・29小節)
こっちのみずは あまいぞ	(5・6小節)	ほ ほ ほたるこい	(30・31小節)
ほ ほ ほたるこい	(7・8小節)	こっちのみずは あまいぞ	(32・33小節)
ほ ほ やまみちこい	(9・10小節)	ほ ほ ほたるこい	(34・35小節)
ほたるのおとさん かねもちだ	(11・12小節)	やまみちこい	(36小節)
どうりでおしりがぴかぴかだ	(13・14小節)	あんどのひかりをちよとみてこい	(37・38小節)
ほ ほ ほたるこい	(15・16小節)	ほ ほ ほたるこい	(39・40小節)
やまみちこい	(17小節)	ほ ほ やまみちこい	(41・42小節)
ひるまはくさばのつゆのかげ	(18・19小節)	ほ ほ ほほ	(43・44小節)
よるはぼんぼんたかじょうちん	(20・21小節)	ほ ほ ほ	(45・46小節)
天ぢくあがりしたれば	(22・23小節)		
つんばくらにさらわれべ	(24・25小節)		

3-3. 合唱曲「ほたるこい」の歌詞は秋田のわらべうたか

合唱曲「ほたるこい」の歌詞が秋田地方のわらべ唄と紹介されている記事や動画も多いが、楽譜集『東北地方のわらべうたによる九つの無伴奏女声合唱曲』には「ほたるこい」が秋田地方のわらべ唄とする記載は無い。そこで、まずこの歌の歌詞が秋田のわらべ唄なのかを検討してみたい。

合唱曲「ほたるこい」の歌詞には、〈あっちの水型〉(＝第 3-6・28-29・32-33 小節)、〈山道来い型〉(＝第 9-10・17・36-38・42 小節)、〈螢の親父型〉(＝11-14・18-21 小節)、〈燕にのまれる型〉(＝第 22-25 小節)の 4 型の螢狩の唄の歌詞が用いられている。〈山道来い型〉〈螢の親父型〉はほぼ全国的に見られる唄であるが(後藤, 2023)、いずれも東北地方から多く採集されている。ただし、〈螢の親父型〉の唄は北関東の茨城・栃木両県から東北地方にかけて多く採集されているもの(三谷, 1954; 北原, 1954 ほか)、秋田県からはわずかに

◇ほたるさん、うれしや、昼はひいつき草のかげ、夜の夜中に高ちょうちん
という「ほたるのおとさん金持だ…」という前半部分を欠く唄が平鹿から記録されているだけで(秋田教育研究所, 1964)、この型は秋田県ではほとんど歌われていなかったとみられる。次に、〈燕にのまれる型〉であるが、この型の唄は東北地方でも類歌の分布範囲は岩手と宮城の両県に留まっている(後藤, 2023)。このように合唱曲「ほたるこい」には秋田では一般的でない型の歌詞や採集されていない型の歌詞が使用されていることから、この歌の歌詞が秋田地方のわらべ唄である可能性は低いといえる。

合唱曲「ほたるこい」の歌詞が“秋田地方のわらべ唄”とされたのは、次の楽譜集が影響しているのではないと思われる。1979 年に刊行された『花の季節：女性合唱曲集』(教芸音楽研究グループ編著)では歌詞を「秋田地方民謡」と、刊行年不詳の『少年少女合唱と女性合唱のための世界合唱』(後藤田純生編)では歌詞を「秋田地方わらべうた」としている。そして、これらの楽譜を用いて収録されたレコードやコンサートのプログラムなどに“秋田地方のわらべうた”と紹介されことにより、広まっていったのではないだろうか。

インターネットには合唱曲「ほたるこい」をわらべ唄と混同されていると思われる記事も見られる⁽⁸⁻⁹⁻¹⁰⁾が、これは一部で小倉朗を作曲者ではなく編曲者と紹介されていることが影響していたのではないと思われる。小倉を編曲者とされた楽譜集は 1969 年発行の『女声の音楽』(女子大学音楽研究会編)があり、前述の 2 つの楽譜集でも小倉編曲とされている。また、“NHK みんなのうた”で放映された「ほたるこい」(初回放送：1966 年 6 月～7 月)でも「作詞：日本民謡，作曲：日本民謡，編曲：小倉朗」と紹介され⁽¹¹⁾、これを元に作製された楽譜集『NHK みんなのうた 一 第 6 集』でも「わらべうた，小倉朗編曲」と記載されている。

三谷(1954)は異なる型の螢狩の唄が出会った時、どちらかの唄の駆逐、共存、混合が生じると述べており、異なる唄が混合した場合には、

◇ほうたる来い山路来い、行燈の光をちょいと見て来い、
あっちの水あにんげあぞ、こっちの水あ甘いぞ [宮城]

◇ほうほう螢こい、螢のおやじは馬鹿おやじ、夜は提灯たかのぼり、
昼は草葉の露のみだ、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ [茨城]

◇ほほほたる来い、やまぶき来い、あんどの光で飛んでこい、
夜は提灯たけのぼり、昼は草葉の露吸って、ほたるなんかいいこった [茨城・群馬]

のように異なる型が繋がった歌詞となる。それは 3 つの異なる型の唄が混合した場合でも同様で、

◇ほうほうほうたるさん、山路こい、
あっちの水苦いぞ、こっちの水甘いぞ、
天竺のぼりしたらば、つんばくらに吞まれべ、下ささがって露コのみ [岩手]

と3つの異なる型が順に繋がった歌詞となり、そこには技巧は見られない。それに対し、合唱曲「ほたるこい」は「あっちの水は…」が2回歌われていたり、「螢のおとさん…ぴかぴかだ」と「ひるまは…高提灯」の間に「山路こい」が挿入されているなどわらべ唄とは完全に別のものである。

2009年6月9日の“Yahoo! 知恵袋”の「テレビの幼児番組で♪ほ、ほ、ほたる来い♪の歌をやって、私の子供の頃には歌わなかった歌詞がついていたのです、もともと最初からついていたのでしょうか？」という質問者も、合唱曲「ほたるこい」をわらべ唄と思ったため違和感を持ったのではないだろうか。こうした誤解は、螢狩の唄には多種多様な唄が歌われていたにもかかわらず、それらは各地の伝承者やわらべ唄の研究者等にしか知られることがなくなり、多くの人にとって知る螢狩の唄は教科書に掲載されたわらべ唄「ほたるこい」だけとなってしまったことがその背景にあると思われる。

4. わらべ唄「ほたるこい」秋田発祥説について

インターネット上にはわらべ唄「ほたるこい」の秋田地方発祥、秋田に伝わる唄が全国に広がったとする記事もあり、これについても以前検証して報告した(後藤, 2014)が再度この問題を取り上げる。

主要なわらべ唄の文献には、わらべ唄「ほたるこい」の採集地に関する記述は見当たらず、秋田発祥を裏付ける資料も確認できない。戦前までのわらべ唄集でこの歌詞が見られるのは、広島高師附属小学校音楽研究部編『日本童謡民謡曲集』の宮崎県の唄であるが旋律は異なる。また、戦前に北原白秋が各地のわらべ唄を収集し、戦後の1949年に刊行された『日本童謡集成第二巻 天体気象・動植物篇』では、関東地方、富山・新潟、近畿地方、岡山・島根、宮崎・熊本からこの歌詞のみが記録されている。

秋田発祥説が生じたと考えられる要因は、採集地(伝承地)と発祥地の誤認である。採集地を発祥地と誤認することは、さいたま市立中央図書館に寄せられた「わらべ歌『ずいずいずっころばし』(旧与野市上落合が発祥)についての文献・資料はあるか」という質問からも窺える⁽¹²⁾。質問者は事前調査で『日本わらべ歌全集 8 埼玉神奈川のわらべ歌』に与野市上落合が発祥の地とあった⁽¹²⁾としているが、回答プロセスを見ると「与野市上落合とあるが、P3 凡例を読むとこの本は採集・採譜した資料集である。神奈川のところにも載っているのに、与野が発祥というわけではないのではないかとあり(傍点筆者)、採集地と発祥地が混同されていることが見てとれる。

発祥地が秋田とされた要因として考えられるのは、ひとつは合唱曲「ほたるこい」が秋田地方の唄と紹介されたことであり、もうひとつは岩波文庫版『わらべうた 日本の伝承童謡』(町田・浅野, 1962)に掲載されたのが秋田で採集された唄であったことである。岩波文庫版『わらべうた』の唄は

ホーホー螢こい(螢) [秋田]
 ホー ホー 螢こい
 あっちの水は 苦いぞ
 こっちの水は 甘いぞ

 ホー ホー 螢こい
 山路こい
 行燈の光で
 又こいこい

という、前半部が〈あっちの水型〉、後半が〈山道来い型〉の混合歌である。この唄の採集地(伝承地)の[秋田]を発祥地と誤解し、「江戸時代から歌われた歌詞」「数ある螢唄の中で最も全国に普及した一」という注解から秋田発祥で全国に普及したと捉えられたことが考えられる。

わらべ唄「ほたるこい」は、推定の域を出ないものの関東地方で歌われていた旋律が全国に広がっていったのではないだろうか。

おわりに

わらべ唄「ほたるこい」の作者を三上留吉とする説は、日本音楽教育協会編『児童唱歌』の応募作・唱歌「ほたるこい」を作曲していたことと、わらべ唄が戦後の音楽教科書に曲名「ほたるこい」*⁷⁾として使用されていたことにより両者が混同され生じたことを示した。また、こうした誤解が生じた根本的な原因として、子どもの歌であるわらべ唄・童謡・唱歌についての理解不足があることが指摘できよう。

「ほたるこい」の作曲者に小倉朗の名前があげられることもあるが、小倉の「ほたるこい」はわらべ唄をモチーフに合唱曲としたものである。また、合唱曲「ほたるこい」を秋田地方のわらべ唄とすることに対しては歌詞の面から否定した。

わらべ唄「ほたるこい」を秋田発祥とする説については、その根拠となる資料は見られないことを示し、またそのような説が生じた要因を検討した。

しかし、インターネット上でこれだけ三上を作者とする情報が広がり、CDや音楽配信等の商業コンテンツにまで使用されると、これが定説化してしまうのではないかとの懸念が生じる。

注)

- *¹⁾ 旧制教育制度の職階の一つ。師範学校や高等師範学校を卒業し免許状を有する、尋常小学校などの正規教員で、現行の教諭と同等の職。
- *²⁾ 1935(昭和10)年に実業補習学校と青年訓練所を統合した勤労青少年の教育機関。企業や事業所により私立の青年学校も多く設立された。
- *³⁾ 蓮仏(1963)では朝日化学肥料株式会社と記述されている。朝日化学肥料は郡是製紙の傍系企業として1935(昭和10)年に創立、1945(昭和20)年6月に解散して郡是製糸に併合、終戦後の同年12月に国土計画興業が買収し同社尼崎工場、1949(昭和24)年傍系企業として分離独立し尼崎肥料株式会社となる。
- *⁴⁾ 三上が採譜した浜村以外にも、鳥取市賀露、同青谷、湯梨浜町泊、同橋津にその地域の貝殻節が伝わっていた⁽¹³⁾。
- *⁵⁾ 「ウタノホン上」は戦後の暫定教科書として1948(昭和23)年まで使用された。
- *⁶⁾ 教師用教科書には「我が國各地にある古來の童謡を整理したもので、「ヨミカタ」(一)三十八頁に掲載されて居るものを、作曲の都合上、一部分修正してある」とあり、最後の2節「ハウ ハウ ホタルコイ」が追加されている。
- *⁷⁾ 戦後の一部教科書では引き続き『ウタノホン上』の曲が「ほたるこい」の曲名で使用されている。また1951(昭和26)年全音発行『音楽(2年)』掲載曲「ほたるこい」は〈山道来い型〉の唄である。

謝 辞

小倉朗の合唱曲「ほたるこい」の構成や特徴など音楽的な側面については、神奈川県立新羽高等学校教頭伊藤育生氏(芸術科音楽)にご教示いただいた。謝して厚くお礼申し上げます。また、前回調査で三上留吉の自筆譜面の閲覧を許可されたわらべ館に改めて感謝申し上げます。

引用サイト

- (1) わらべ館：平成 18 年度以前 童謡・唱歌収蔵資料一覧③
https://warabe.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/18douyou_3.pdf
- (2) 鳥取県文化政策課：童謡・唱歌のふるさと鳥取＞ふるさとの音楽家＞三上留吉
<http://www.pref.tottori.lg.jp/89659.htm>
- (3) 鳥取県文化政策：童謡・唱歌のふるさと鳥取＞童謡・唱歌百景＞ほたるこい
<http://www.pref.tottori.lg.jp/90045.htm>
- (4) わらべ館：鳥取の 11 人の音楽家たち「三上留吉」
<http://www.warabe.or.jp/floor-guide-sum/1f-musicians-from-tottori/1f-musicians-from-torocci-other-11/>
- (5) 吉海直人：研究活動＞教員によるコラム＞童謡「ほたるこい」について
http://www.dwc.soshisha.ac.jp/research/faculty_columm/19264
- (6) oyoike：ほたるこい <https://note.com/oyoike/n/n856b60d94fd9> (2020 年 8 月 3 日)
- (7) 音楽研究所：ほたるこい <https://nu-tech.org/Traditionak/hotaru.html>
- (8) 1/2mama：ほたるこいの全歌詞と歌の意味は？わかりやすいように解説♪
<https://www.ha-hunomama.net/2738.html> (2018 年 6 月 13 日)
- (9) KINO：衝撃！知らなかった!! 「ほたるこい」の歌詞と教え
<https://ameblo.jp/iimono-1-1/entry-12318232654.html> (2017 年 10 月 10 日)
- (10) ひまわり日本のうた＞わらべうた＞ほたるこい (2021 年 6 月 23 日)
<https://douyou-shouka.himawari-song.com/hotarukoi/>
- (11) みんなのうた＞ほたるこい https://www.nhk.or.jp/minna/songus/MIN196606_06/
- (12) 国立国会図書館レファレンス共同データベース＞レファレンス事例詳細＞わらべ歌「ずいずいすっころぼし」(旧与野市上落合が発祥) についての文献・資料があるか。
https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?psge=ref_view&id=1000232360
- (13) 望谷凜之介：鳥取県民謡～貝殻節＞望谷凜之介 https://note.com/cute_auk833/n/nccd715d60f79

文 献

- 秋田教育研究所編 (1964) 秋田県郷土教育資料 — こどもと環境編 — (研究 ; No. 65). 秋田教育研究所.
- 後藤好正 (2014) わらべ唄「螢来い」の作詞・作曲は三上留吉か?. 全国ホテル研究会誌, (47): 10–12.
- 後藤好正 (2023) 螢狩の唄考 4 ～螢狩の唄の分類ならびに多様化の要因について～. 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書, (15): 111–122.
- 後藤田純生編 (19-) 少年少女合唱と女声合唱のための合唱 1・2 [楽譜集]. 水星社.
- 広島県高等師範学校附属小学校音楽研究部編 (1933) 日本童謡民謡曲集. 目黒書店.
- 細川周平・片山杜秀監修, 日外アソシエーツ株式会社編 (2008) 日本の作曲家 — 近代音楽人名事典. 日外アソシエーツ株式会社.
- 稲村修一編著 (1974) 鳥取のわらべ唄 郷土シリーズ 27. 鳥取市社会教育事業団.
- 女子大学音楽研究会編 (1969) 女声の音楽 [楽譜集]. 春秋社.
- 化学工業日報社編 (1953) 化学工業会社録: 昭和 28 年版. 化学工業日報社. [国会図書館デジタルコレクション]
- 上笙一郎 (2005) わらべ唄. 日本童謡辞典 (上笙一郎編). 東京堂出版.
- 北原白秋編・藪田義雄編纂校訂責任 (1954) 日本伝承童謡集成第 2 巻 天体気象・動植物篇. 三省堂.

- 教芸音楽研究グループ編著 (1979) 花の季節：女声合唱曲集 [楽譜集]. 教育芸術社.
- 日本教育音楽協会編(1935)児童唱歌尋常科第一学年用. 音楽教育書出版会. [国会図書館デジタルコレクション]
- 日本放送協会編 (1964) NHK みんなのうた第6集 [楽譜集]. 日本放送出版協会.
- 教育音楽講習会編 (1896) 新編教育唱歌集第一集. 三木書店 [国会図書館デジタルコレクション]
- 教育音楽講習会編 (1905) 新編教育唱歌集修正第五版第一集. 東京開成館. [国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ]
- 町田嘉章・浅野建二編 (1962) わらべうた 日本の伝承童謡. 岩波書店 (岩波文庫).
- 三谷栄一 (1954) 螢狩の唄と田の神. 日本民俗学, 2(1):25-53. 日本民俗学会.
- 文部省 (1903) 尋常小学読本三. 文部省. [国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ]
- 文部省 (1941) ヨミカタ一. 文部省. [国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ]
- 文部省 (1941) ヨミカタ一: 教師用. 文部省. [国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ]
- 文部省 (1941) ウタノホン上. 文部省. [国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ]
- 文部省 (1941) ウタノホン上: 教師用. 文部省. [国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ]
- 小倉 朗 (1974) 北風と太陽—自伝. 新潮社.
- 小倉 朗 (1979) 小倉朗女声合唱曲集 [楽譜集]. 音楽之友社.
- 新日本海新聞社編 (1997) 童謡・唱歌百景. 新日本海新聞社.
- 山本清洋 (2019) わらべ歌「あんたがたどこさ」の発祥を巡る考察. 豊岡短期大学論集, (16):85-93.
- 蓮仏重寿 (1963) 貝殻節—三上留吉の一生—. 久松文庫.